

政宗謀反の噂と徳川家康

平川 新

一 元和二年、政宗謀反の噂

元和二年（一六一六）年一月一日、江戸にいた豊前国小倉藩主細川忠興は、国元の息子忠利に次のように急報した。

（前略）政宗之事、今に色々申候、ざうせつともまこと共しれ不申候、内々陣用意可然候

（傍点筆者、以下同）『大日本近世史料 細川家史料』一

伊達政宗について真偽不明の種々の噂が出ていたので、内々に出陣の用意をするようにという指示である。次は元和二年一月一六日の忠利宛忠興書状である。

一、此方（江戸）之事、政宗事色々申候、今ハ下候までとハ不見候、就其、内々陣用意の事申候、飛脚下シ候、いかとしれぬうちにて常之事とは不見候、十が九ツも大略内政宗可被出と存候へとも、千二一ツ大坂などの事ニ付候てハ被出ぬ事も可在之かと存候、いかニもをんミつにて用意肝要候、武具ニハ別の事に

政宗謀反の噂と徳川家康

候ましく候、路地之兵糧用意の金銀かり候事、陣用意にて候、可被得其候（中略）
一、かつさ殿（松平忠輝）の事も今ニ不済、当地より三か地ほど在之所うすいのたけの下何とやらん申所ニ御入候由候事

（同前）

前便と同様に、政宗について色々な噂があるので内々に「陣」の用意をしておくようにと伝えている。「十が九ツも大略内政宗可被出と存候とも」とあるのは江戸出府のことかと思われるが、「大坂などの事」については千が一にも出てこないこともあり得るという。「大坂などの事」はおそらく大坂夏の陣に関連することであろう。政宗が出てくるか出てこないかによって事態は変わる、とみているのである。

第二条にある「かつさ殿の事も今ニ不済」とあるのは、松平上総介忠輝が大坂の陣の際におこした不祥事のことだと思われる。大坂に向けて進軍した忠輝の軍列を近江国守山で將軍秀忠直屬の旗本軍が追い越したため、非礼だとして忠輝の家臣が旗本二人を斬り殺す事件が発生した。ところが忠輝はこれを將軍に報告せず、しかも遅参してしまった。これに激怒した家康は元和元年九月、忠輝に蟄居を命じてい

るが、この問題がまだ片付いていないという意味であろう。続く文章に「当地より三か地（三日路）ほと在之所」とあるのは江戸から三日ほどの距離にある所という意味で、「うすいのたけの下何とやらん申所」のことである。このあたりの事情について、『徳川実紀』元和元年一〇月条（第二篇七四頁、吉川弘文館）から確認しておきたい。

此月、越後少将忠輝朝臣は、先の罪謝せられんがため上野国深谷までおはして仰を待れしが、其所は猶御狩場に近ければとて藤岡へ移られたり。これは先に御対面かなふべからずとの御使つかはされしにより、朝臣大におそれられ、是彼につきて嘆申されけるが、駿府の宿老等より、今は国にましまさん事しかるべからず。かつは遠き境より御なげき仰られんも、便りよかりぬとも覚え、上野の国辺迄も渡らせ給ひ、関東へ御なげき有べきにやと申進らせしかば、さらばとて此所までいたり給ひしなり。

これによれば、家康の勘気をこうむった忠輝は国元の越後から謝罪を入れたが、駿府の宿老から上野国まで出てきて詫びを入れるようにという助言があったため、上州藤岡で許しを待ったという。前掲した細川忠興書状にある「うすいのたけの下何とやらん申所」というのは、碓氷峠の手前にあるこの藤岡のことだとみてよいだろう。なお、『徳川実紀』元和二年正月二三日条には次のようにある。

房達、生母阿茶の局等により、身の罪を様々陳謝せられしかども、大御所更に聞召入られず。

忠輝は、年を越えた一月の下旬には駿府の八幡に居場所を変えている。それまでは藤岡に滞在していたのであろうから、その情報をもとに忠興は前掲した一月一六日付けの書状で「うすいのたけの下何とやらん申所」と書いたのだと思われる。次は、元和二年一月二一日の忠利宛の忠興書状の一節である。

一、爰元之様子先書ニ申遣候、正宗之儀尔今実説不知候、やかて被上との沙汰も此一兩日御入候事

（『大日本近世史料』細川家史料一）

政宗の件はいまだ不明だが、一兩日中には政宗に対して上府の沙汰があるのではないか、という意味である。細川家文書の四番目として、やはり忠興から忠利に宛てた同年二月一二日の史料もあげておこう。

去朔日之書状、今日十二、於駿府令披見候、政宗儀、先書二具申遣候、兎角知レ不申候、陣用仕、損二成ぬ事二候間、内々可被申付候

（同前）

この頃、上野介忠輝朝臣は駿河の八幡に旅宿ありて、駿府の女

このころ忠興は駿府にいたようだ。これに先立つ一月二二日、家康

は駿河で鷹狩りの最中に倒れていた。そのため將軍をはじめ諸大名は、次々に駿府に見舞いに駆けつけていた。この手紙もそうしたなかで書かれたものであった。政宗のことはまだ分らないが「陣」の用意を怠らないようにと、再度の指示を出していたのである。

このように、一月中旬から二月中旬に出された細川忠興の四通の手紙には、陣立ての用意をするようにとの指示や政宗の動向を注視した文言があった。政宗に不穏な動きがあるということだろう。じつはこれと同様の噂を書きとめた史料が、毛利家文書のなかにもあった。元和二年二月六日、毛利輝元が江戸の家臣に宛てた書状の一節である

奥州表御出陣之様、世上風聞候、事實候は其方より可申越と存候て有之事候、具承度候

『大日本史料』第十二編之二十四、五五頁

將軍が奥州表（政宗）に対して出陣するという風聞がある、としている。事実かどうか具体的な情報を寄こすようにという指示である。

以上紹介したように、細川はみずから陣立ての用意をし、毛利は將軍出陣の噂があると書きとめている。幕府サイドで政宗に対する何らかの動きがあったとみてよいだろう。大名家文書を丹念に探せば、両家以外からも同様の史料が出てくるかもしれない。

それにしても、いったい政宗に何がおきていたのだろうか。

政宗の名前が出てくる噂が、イギリス商館長リチャード・コックスの日記にもあった。一六一六年二月二十九日（元和二年二月三日）条か

ら紹介しておこう。

（平戸在の）私は（京都在の）イーストン君に手紙を一通書いて、皇帝（家康）と、彼の息子で自分の義父マサモネ殿（政宗）の後だてを受けているカルサ様（上総介）との間に戦争が起こりそうだが、これは皇帝が彼の息子（忠輝）に大坂の城と領地を、たとえそれが手に入っても彼（皇帝）がそうしようと先に約束した通りにはこれを与えようとしないからだ、等々との知らせが来たことを記し、私は彼に、もし戦争が起こりそうであるならば、彼が立退いて、現金を携え、もしそれが可能なら残品を現金に携えて戻って来るように、と差図した。

『イギリス商館長日記』日本関係海外史料訳文編之上

平戸にいるコックスのもとに、京都に滞在中のイーストンから届いた情報である。ポイントは家康と松平忠輝との間に戦争がおきそうだ、ということにある。戦争の原因は、大坂を忠輝に与えるといった家康がそれを反故にしたからだという。噂の信憑性はともかく、家康と忠輝の不和が人口に膾炙していたことを示している。

この噂は、家康と政宗の不和または戦争の可能性を直接的に示すものではないが、「義父マサモネ殿の後だてをうけているカルサ様」という文言には注意を払っておきたい。これは政宗と忠輝との親密な関係を前提にした表現だといってよい。この手紙は和暦では一月二三日に書かれているから、細川や毛利が得た政宗「陣」と関連がある噂だ

と考えることができる。世間では、「忠輝と家康」との戦争、または「忠輝+政宗」と「家康」との間の戦争が起こるかもしれない、といった情報が流布していたのである。

二 噂の真相

1 「木村宇右衛門覚書」より

細川忠興は政宗の情報を得ると息子の忠利に「陣」の用意を命じ、毛利輝元は將軍による「奥州表御出陣」の情報を書きとめていた。イギリス商館長のリチャード・コックスも松平忠輝および政宗と家康との間に戦争が起きそうだという情報を得ていた。しかしそれにしても、なぜこの時期に、こうした情報が世間に流布したのだろうか。その事情を説明する手がかかりが、「木村宇右衛門覚書」にあった。

木村宇右衛門とは晩年の政宗に近侍した小姓であり、政宗が木村に對して折々に語った懷旧談をまとめたのがこの覚書であった（小井川百合子編『伊達政宗言行録 木村宇右衛門覚書』新人物往來社、一九九七年）。そのなかの一項に、寛永九年（一六三二）一月、二代將軍徳川秀忠が余命いくばくもない時期に政宗を枕元に招いて語ったという、次の言葉が収録されている。なお著者は不明だが、ほぼ同じ内容の記事が「名語集」（仙台叢書第一卷所収、宝文堂）にもある。

（前略）権現様駿河にて御病氣、いまくの折節、御手前の事しきりにあしさまに申あくるにつゐて、我等にハ江戸へ帰り仙台陣（東郷）

の心かけすへしと仰によつて、其用意最中のみきり、御手前へおかち（東郷）に仰付られ、御内々にてする（東郷）かよりはやうちたつ。御手前とりあへすのほり給ふよし我等に聞て、いかさま人のあしさまに申により、めさせられ仰きけらるゝとみえたりとおもふことく、江尻に一兩日休息、其後御対面あつて御存分仰はとけられ、其上我等の事其方へ御頼、天下おたやかにとりたてたまへと、御まつこの御こと葉をたかへす、今日唯今にいたるまで御心指ゆへ、天下の浪風しつまり、三代將軍にへあかり、代をまつたくゆつる事、是ひとへに大御所様の御いくわう、御手前当家へ心指ふかくましますゆえなり。今もつて其例にまかせ、將軍の事、御手前へ万事頼申也。身まかりて後ハ將軍へも申おく。御手前を親とおもハれ、御手前も子供とおもひ、物ことえんり（東郷）よなくいけんをもの給ひ、天下つ、かなき様にまかせ置候。又其方も年よられ候へは、子供（東郷）の事ハ將軍如在有ましく候。能々被仰合御頼有へし。此旨今朝直々將軍へも申置との給ふて、御なみたを御名残おしきよしにてなかせ給ふ。（後略）

（『伊達政宗言行録』一四二―一四七頁）

ここで語られたという秀忠の話を文脈に即して要約しておく、次のようになる。

・権現様（家康）が駿河にて病氣の節、お手前（政宗）のことをしきりに悪しく言い、我（秀忠）は江戸に帰つて仙台陣の心がけをすべしと命じられた。

・その用意の最中に（家康に指示された）於勝（家康側室、英勝院）が、駿府から内々にお手前に早馬を出した。

・御手前（政宗）がすぐに上る旨を我等も聞いた。

・いかにも人が（政宗のことを）悪し様に言ったので、（家康が政宗を）召されて仰せ聞くのだと思った。

・（政宗が）江尻に一両日休息したあと、（家康と）御対面があり、存分に仰せをとげられた（疑いを晴らした）。

・その上、我等（秀忠）のこともその方へ頼んだ。「天下穩やかに取り立て給え」という（家康の）末期の言葉を違えず、今日唯今までその御志しをみせてくれたので天下の浪が静まって、三代將軍に代を譲ることができた。これもひとえに大御所様の御威光とともに、御手前の当家への志しが深きゆえなり。

・いまその例に任せ、將軍（家光）のことを御手前へ万事頼み申すなり。

・身罷りてあと（自分亡きあと）は、御手前を親と思うように將軍へ申し付けておく。御手前も（將軍を）子供と思ひ、物事遠慮なく意見を言うてくださり、天下につつがなきよう、任せおきたい。

・またその方も年をとったので、子供（忠宗）のことは手ぬかりのないように直々將軍に申しおくといわれ、名残惜しいと御涙を流された。

家康が倒れたのは一月二二日であるから、見舞いに駆けつけた秀忠

政宗謀反の噂と徳川家康

に、江戸に帰って「仙台陣」の用意をすべしと命じたのは、それより以後のことになる。そこで『徳川実紀』で秀忠の動向を確認してみると、二月一日に江戸を出て二日に駿府に着き、病床の家康に對面している。以後秀忠は、二月二二日の見舞いの勅使や三月末に家康を太政大臣に任じるために下向した勅使の応接などをおこない、四月一七日に家康が没したあとの二四日まで駿府にとどまっている。したがって、この間に秀忠が江戸に戻って「仙台陣」の用意をした形跡はない。では、「仙台陣」の用意を命じた家康の話は作り話ということになるのだろうか。必ずしもそうではない。なぜなら「木村宇右衛門覚書」での秀忠の話しぶりからすれば、江戸に戻ってみずから「仙台陣」の用意をしたと語っているわけではないからである。家康からそのような指示を受けた、と述べているにすぎない。したがって、父家康の看病のために自分は駿府にとどまったまま、江戸に「仙台陣」の用意を命じたという可能性はある。

いっぽう政宗の動きを追ってみると、『徳川実紀』の二月二二日条に、政宗が駿府に着いて家康を見舞ったという記事がある。伊達家の正史である『伊達治家記録』には、二月一〇日に仙台を出発し、二二日に駿府に着いたと記されているので、政宗の駿府上りについては一致している。「木村宇右衛門覚書」には、この駿府上りについての政宗自身による懷旧談も記されている。政宗謀反の噂に関する根本史料ではあるが、紙幅の制限があるので政宗が語った内容を簡条書きにして紹介しておこう（『伊達政宗言行録』一四四〜一四七頁）。

①家康公ご不例（病氣）により我らも上ろうとしたら、將軍秀忠公

が江戸に帰り、仙台陣の用意をしているという情報が次々に入ってきた。一門衆を集めて江戸からの情報を伝えたが、何ゆえ天下の御馬をうける（攻められる）のか、理由がわからない。一度はその理由をお尋ねしないわけにはいかない。身に覚えのないことも申し上げたい。とはいえ、内々に評定を調べておくことは尤ものことだ。

②天下勢（幕府軍）に城を攻められては勝つ見込みがない。成実と石川大和の両大將は駒ヶ嶺と新地で小斎と金山・伊具の輩を引き連れて守り、かなわないとなったら阿武隈川を最期の防衛線とすべし。福島筋の本道には派兵するには及ばない。なぜなら、丸森の西南の山の内に名地があり、川原が狭く南方の岸が高い。鉚持ち二、三百人も遣わして大木や大石を山から転がして川を埋めれば、水が溜まって福島表は五日十日のうちに湖になるだろう。そうすれば鳥以外は通ることができなくなる。越河に張番を出して固め、斎川を防衛線とする。米沢筋は関と渡瀬、戸沢筋を固め、白石城を持ちこたえる。最上筋は笹谷を固め、奥筋の押さえは伊達上州、中通りは元安濃州が弱い所に加勢すべし。旗本が大軍では自由に動きにくい。場所を決めずに破られた所を命限りに防ぐべし。我らに武運がなく、弓折れ矢尽きたとしても城を枕に討ち死にはならない。残る人数を引き連れて石巻に引き込むべし。大河（北上川）を前に戦えば、上方勢は思いもよらぬ長陣を余儀なくされるだろう。

③こうした評定をしているところに、駿河の於勝から早馬で文が届

いた。いつときも早く上って（家康と）御対面しないと、時日がたつほどに御為に悪しきなり、とあった。皆々に意見を聞いたところ、女の文に糺されて上るなど御運も末のこと、とどまりたまえ、と一同がいった。

④一兩日思案したが、身に覚えがないことなので、とにかく上ってみないわけにはいかない。もし我が身（政宗）の運が尽きて江戸か駿河でどうにかなったならば、城を枕に跡はまかせたと、百四五十人にて馳せのぼった。江戸の町ではここもかしこも陣立ての用意がされていた。

⑤江尻に着いて於勝に使者を立て、唯今参着、御指図次第に駿河に参るべしと伝えたところ、家康公より、思った通りだ、明日御対面あるべしとの仰せがあったと、於勝から返事があった。

⑥明るる日、駿府城に登ると、すぐに寝間に召された。障子の外で脇差を抜いて入らんとすれば、（家康公が）それを御覧になって、脇差を氣にするほどならば呼び参らせたりはしない、そのまま入りたまへといわれた。

⑦久しくお会いしていなかったが、思いの外に（家康公の）病氣が重く弱っていた。しかし二、三日は落ち着いているといわれた。

⑧私が申し上げるに、御病氣のことを聞いて馳せ上ろうと考えていたところに、秀忠公が仙台まで御出陣の御用意と承った。毛頭覚えのないことだが、お尋ねするのも憚ってお見舞いも遅くなった。そこへ於勝を通じて仰せがあったので喜んで馳せ参った。

⑨唯今は御養生が肝要と申し上げれば、（家康公は）そなたのこと

について讒人があり、このままでは天下の大事になるとしきりにいうので、將軍は江戸に帰られ、仙台陣の用意を専らにした。

⑩つらつら案じるに、それは誠ではないと考え、於勝を通じて密かに（政宗に）伝えさせた。もし怪しみ（謀反の意志）があれば上つてこないだろう。よもや双葉のような馴染みを忘れることはないだろうと思っていたが、その通りに馳せのぼつてこられた。私（家康）の思った通りだと仰せられた。

⑪そうでしたか。誰がどのようなことを言ったのでしょうかと申し上げれば、このように上つてこられた以上は隠すこともない。そなたの子（婿）でもあり我が子でもある上総守（松平忠輝）が、しきりに言ってきたと仰せられた。それは何ごとを申し上げたのですかと尋ねた。

⑫先年の大坂の陣の際に、（忠輝が）人数を繰り出して（家康の）御用に立ちたいと思っていたが、政宗が（豊臣）秀頼と心を合わせて、いたずらに酒盛りをして日を暮らし、我らの進むのを妨げた。大坂方が弱くなるにつれて、（政宗は）やむなく人並みにご奉公をしているふりをした。このたびの御不例（病氣）を幸いに天下を奪おうとしている、など様々なことだ、といわれた。

⑬これは言語道断だ。上総守殿は乱心されたのではないか。

⑭秀頼よりたびたび（味方せよとの）仰せがあったが承引しなかった。（秀頼の）直書に、秀吉公の御恩を忘れて味方しないことは人に顔向けできないことだとの悪口までいわれた。天下分け目のこのとき頼み申す、との秀頼の直書を和久宗是の子供が使いとし

て持参してきたが、すぐにその書を（家康公の）御披見に入れたことは御承知のことなり。

⑮（大坂の陣の）途中で酒盛りをして跡先を見合わせたということについては、取るものも取りあえず駆けつけたために人数が揃わず、それがために所々に待ち合わせたからだ。また大坂城はそうたやすく落ちることはなく、長い陣になるので無勢ではいかがかと考えて、後続が集まるのを待つために休んだのである。しかるに上総守は遅参して大坂方と手合いをしなかっただけではなく、いわれぬ讒言をするとは何ごとであるか。

⑯いま御不例の機会をねらつて（徳川の）天下に妨げをする謂われはない。以前に（天下を）奪うことができる時節ですらこの身に授からなかった天下であり、いまその望みはない、と申し上げた。

⑰（家康公は）、例の不覚悟者（忠輝）は遅参して手合いもできなかったために人を謗った。今後は（政宗も）子供と思うべからず、我らも子とは考えない。將軍へも兄弟だとは思わないようにと堅く申し付ける。天下を妨げ悪事をいたすは、この者（忠輝）なり。必ず押し込めて出すべからず。

⑱今後、將軍のことは御手前（政宗）へ任せおくことにする。つつがなく天下を保つことができるかどうかは、ひとえにそなたの計らいにあることだ。

⑲我なきあとはそなたを親と思うように、將軍へくれぐれも申しおく。そなたのあとは子供を將軍に預けよ。当家（伊達）へのお志しは徳川の家が続くかぎり疎かにすることはない、などというい

ろ様々に（家康公が）物語りされた。

②〇一兩日休息して江戸で將軍に会い、国元へ帰った。（家康公が）病氣のためにすぐに亡くなるとは思わず、お暇をいただいで、江戸で公方様にお目にかかって下向した、とのことである。

以上の話は、内容からみてほぼ六つに分けられる。第一は「仙台出陣」の噂、第二は將軍秀忠の仙台攻めに備えた防衛構想、第三は家康の側室於勝（英勝院）から来た早文に対する家中評議、第四は政宗の駿府上り、第五は松平忠輝による政宗讒言、第六は家康に後事を託されたこと、である。以下に順を追って検討していこう。

2 松平忠輝による政宗讒言

まず第一の「仙台陣」については、政宗のもとにも江戸から次々と將軍秀忠による「仙台出陣」の情報がはいってきたとある。しかも簡条書④（以下、番号のみを記す）の項目にあるように、政宗が駿府に馳せ上るために江戸に入った際、市中ではたしかに「陣立」の用意がされていたという。

ただ気になるのは、將軍秀忠が江戸に戻って「仙台陣」の用意をしたとする点である。前述のように『徳川実紀』によるかぎり、秀忠は家康が没するまで駿府を離れていない。それだけならこれも前に述べたように、秀忠が駿府から江戸に「仙台陣」の用意を命じたという解釈の余地があるのだが、問題は②にあるように、政宗が家康逝去の直前に駿府を発って江戸で秀忠に拝謁した、とある点である。政宗は駿

府を離れたことについて、家康がすぐに亡くなるとは思わなかったと述べているが、『伊達治家記録』によれば、たしかに家康が亡くなる前の四月四日に駿府から江戸に向かっている。江戸で家康の訃報を聞いた政宗が仙台に発ったのは、五月五日のことであった。しかし同書には、江戸屋敷滞在中に政宗が將軍に拝謁したという記事はない。したがって「木村宇右衛門覚書」にある政宗の懐旧談は、事実とそぐわない部分があるとみてよいだろう。ここでは政宗の記憶違いということにしておきたい。

では、「木村宇右衛門覚書」にある政宗の話は信用できないことになるのだろうか。必ずしもそうではない。なぜなら、政宗「陣」に関する噂や「陣」の用意については、細川家や毛利家の史料で確認できるからである。したがって、江戸から「仙台陣」の情報が次々に届いたという部分には根拠があるといつてよい。だとすれば、政宗の側が「仙台陣」に備えて、第二にあるような防衛構想を検討することがあつても不思議ではない。

その防衛構想については紙幅の関係から別稿で改めて検討することとし、第三の於勝からの早文に対する家中評議についてみておこう。遅くなればなるほど御為にならず、早く上り来たれ、と勧める於勝の書状に、家来たちが女の文に促されて上るのは運の末と反応したというのも面白い。だが思案の末に政宗は、止める家臣の手を振り切つて駿府に向かった。家康は⑩にあるように、政宗が来なければ謀反の意志ありと考えていたので、もし政宗が家中の意見に与して出府を見合わせていれば、「仙台陣」は現実のものになったということになる。

もしこの判断を誤っていたら、伊達家は存続できなかっただろう。このあたりに、ピンチをすり抜ける政宗の判断力の秀逸さがあらわれている。

第四の駿府上りについてだが、於勝に促されて政宗は二月一〇日に仙台を出発した。だが江戸詰めの中臣茂庭綱元から、宇都宮に着いた政宗のもとへ急報が届いた。それによると幕府年寄本多正信から茂庭綱元に、大御所（家康）は本復に向かつており奥州筋は飢饉なので秋冬まで出府には及ばず、と將軍から指示があった、というのである。

政宗はこれに対して、小山か久喜に逗留して駿府の意向を確かめると茂庭に返書している。一六日と一七日に久喜に二泊しているのは、そのためであった。一八日に江戸屋敷に入ると翌一九日には出立し、二日に駿府に到着した。この行程を記した『伊達治家記録』には、「駿府ヨリ何様ノ御左右アリシヤ不知」とある（同三、三〇六―七頁）。

出府に及ばずという本多正信の知らせは、將軍秀忠の指示によるものであった。江戸では「仙台陣」の構えを見せている最中であるから、これと関係した思惑があったのかもしれない。しかし政宗は於勝から急いで駿府に上られよとの書状を受け取っていたのだから、困惑しただろう。久喜で様子をみたのはそのためではないだろうか。「木村右衛門覚書」によれば、家康は駿府に着いた政宗を待ちかねるように迎え入れたのであった。

次に、第五にあげた松平忠輝による政宗譏言のことを検討してみよう。これは本論のハイライトでもある。なぜ家康は將軍秀忠に「仙台陣」の用意を命じたのか。それは政宗の謀反を疑ったからだが、その

疑いをもたらしたのは家康の六男である松平忠輝の譏言によるものであった。家康が明かした思いもかけない事実には、政宗は大きな衝撃を受けた。

忠輝が大坂の陣における不始末で家康の勘気をこうむっていたことは前述したが、家康によると忠輝は遅参の理由について、豊臣方と内通した政宗から進路を妨害されたためだと弁明したという⁽¹²⁾。しかも家康が病に倒れたのをこれ幸いと天下を奪おうとしている、とまで言ったという。これを聞いた政宗が、「是ハ言語道断、かつさの守ハ乱心いたされたる物なるへし」⁽¹³⁾と憤激するのも当然であった。

政宗は家康に対して、豊臣方から幾度も誘いをうけたが断つたと述べている⁽¹⁴⁾。その一つとして、和久半左衛門宗是の子（和久半左衛門宗友）が政宗に届けた豊臣秀頼の直書を披見に入れたことをあげている。

和久宗是は豊臣秀吉の側近として政宗と秀吉の間を取り持ったため、秀吉没後の慶長一七年に政宗は宗是を二千石で仙台に招いた。だが慶長一九年大坂冬の陣の際、秀吉の恩沢に応えるため宗是は大坂に戻り、翌元和元年五月の夏の陣で戦死した。いっぽう和久宗是の子である和久宗友は豊臣秀頼に仕えていたが、政宗と宗是のこうした間柄をたのんで秀頼は、冬の陣が勃発する直前に宗友を政宗のもとに使者として派遣している。その秀頼の直書には、家康の指示に違背するつもりはなく、家康との間をとりもってほしいと書かれていた。これをうけた政宗は宗友を箱根関所まで送り届けたが、宗友は政宗の指示により下向の理由を將軍秀忠に口上書として提出したのであった（『伊達

治家記録」三、二〇四―二二頁。家康に対して政宗が秀頼の直書を披見に入れたと述べたのは、このことを指している。

政宗謀反の動きに関しては、これまでの研究でも次の二つの事柄として言及されてきた。一つは政宗による慶長遣欧使節派遣の目的を、スペインと軍事同盟を結んで幕府を倒すためとする説であり、二つめは家康の六男であり政宗の女婿（長女五郎八姫の夫）である松平忠輝を盟主に、幕府代官の大久保長安らと組んで倒幕をはかろうとしたとする陰謀説である。両説は、明治時代から現段階にいたるまで折にふれて唱えられてきた。このうち慶長遣欧使節をめぐる軍事同盟説については、史料解釈に難があつて成り立たないことを、「慶長遣欧使節と徳川の外交」（仙台市史特別編8『慶長遣欧使節』所収、二〇〇八年）で論じたので、ここではふれないことにする。

もう一つの忠輝・長安との連携による倒幕陰謀説については、伊達政宗研究の第一人者である小林清治氏の初期の著書『伊達政宗』（吉川弘文館、一九五九年）においても、「忠輝は大久保長安の天下乗取りの計画にかつがれたというが、その岳父にあたる政宗がこれに関係した可能性は十分に考えられる」と述べていた。だがいっぽうで小林氏は、「この陰謀に対して政宗が期待を寄せたことは疑いないが、齢五十に及んで思慮をさらに深めた政宗が、これに積極的に参加したと考えることは困難である」とも指摘しているように、政宗のかかわりについては評価を定めていかなかった。とはいえ、長安を中心とした倒幕の陰謀があつたということを前提にした内容になっている。しかし一九八七年発表の「悲運の支倉六右衛門」（『伊達政宗―文化とその遺産』

里文出版。のち小林著『伊達政宗の研究』所収、吉川弘文館、二〇〇八年）では、現在の倒幕・陰謀説の源流ともされる明治期の箕作元八や阿部秀助などの説を検討して、これらの解釈が成り立たないことを論じるにいたつた。

その大久保長安陰謀事件というのは、慶長一八年の長安の死後、屋敷からおびたらしい金銀財宝と異国と連携して幕府転覆をはかる連判状が発見されたというものである。この連判状は残されていないが、一説によれば、松平忠輝を盟主として長安は関白となり、小田原城主大久保忠隣、松本深志城主石川康長、安房国館山城主里見忠義らが一味となつて幕府転覆を謀る計画があつたという（村上直『江戸幕府の政治と人物』同成社、一九九七年）。陰謀の存在は確認できないが、長安の一族や関係者は大量に処分されている。村上直氏はこれを、家康側近の本多正純らがライバルである大久保忠隣追ひ落としのために、忠隣の家人である長安の不正蓄財などを告発したのではないかとみなしている。実際、大久保忠隣も直後に失脚した。また『国史大辞典』（吉川弘文館）の「大久保長安」の項目でも所三男氏が事件の真相は不明とし、長安の生前における権勢と巨大な資産に対する反発が厳しい処分を生んだのではないかとみている。

『徳川実紀』には、長安の死後、「長安が数年の贓罪あらはれ、国々に令してその贓貨を査検せしめらる。よて長安が属吏等を彦坂九兵衛光正に命じ獄に下さる」（第二篇、六三頁）とある。吟味の結果、長安が隠匿していた金銀は五千貫目にのぼつたというから、長安死後に不正蓄財が暴かれたということは間違いないようだ。一方、次のよう

な記事もある。

長安が生涯寢所の下に石室を設け、その中に黒き箱有りしといふ。依て其箱をめしよせて査検あれば、其中に長安この年頃、朝鮮に交通し、私に財宝をかゝの国に贈りし文書どもを入置しが、中には大不敬の事共、又は連座の諸大名も多くあり。これより長安が罪科重くなり、連及の大名等もその事となく罪蒙りしとぞ。誠にや。

『徳川実紀』第一篇、六三二頁

長安の寢所の下に石室から発見された文書箱に、朝鮮に財宝を贈っていたことを示す文書と、「大不敬の事共」を示す文書があったという。「連座の諸大名も多くあり」というのは、「大不敬」に係した大名の名前も多く出てきたことであろう。この「大不敬」に関する文書というのが、先の一味連判状であるかのようにみえるが、『徳川実紀』の編者は「誠にや」と疑いの目を向けている。『徳川実紀』編纂段階（文化・嘉永年間）ではすでに伝聞記録しか残っておらず、陰謀事件の真相は不明だったということである。

政宗が長安陰謀事件に関与したというのは後世の伝聞記録にある一説なのだが、幕府転覆という陰謀の存在自体が疑われているのだから、政宗がそれに関与したというのも確たる根拠があるわけではない。同じく忠輝の陰謀加担説も根拠はないが、長安は松平忠輝の付家老であり、忠輝の岳父が伊達政宗であったことから、三者の親密さに

政宗謀反の噂と徳川家康

好奇の目が向けられ、三者連携による倒幕陰謀説が語られはじめたということは考えられる。とくに忠輝は、長安が没した翌年に大坂の陣の不始末の責任を問われて家康から勘当され、兄の將軍秀忠は忠輝を改易・配流に処した。またこれまでみてきたように、同じ時期に政宗も謀反の疑いをかけられている。こうしたことが交じり合って、後世に忠輝盟主説や政宗加担説の尾緒がついたのであろう。

もし忠輝と政宗が本当に長安と連携して倒幕計画をめぐらしていたとしたすれば、忠輝は家康に対して、政宗に謀反の意志あり、と訴えることはできなかったのではないだろうか。なぜなら、もし訴えた場合、謀反の疑いがみずからに跳ね返ってくる危険が高いからである。

したがって政宗が豊臣方と内通していると忠輝が讒言したことは、かえって両者の間に倒幕計画の連携構想が存在していなかったことの傍証となるように思われる。

以上みてきたように、政宗謀反に関してこれまで注目されてきたのは、慶長遣欧使節によるスペインとの軍事同盟説や、松平忠輝・大久保長安らとの倒幕連携説であった。したがって、政宗が大坂の陣において豊臣方と連携したとする話や、家康不例を機に謀反を画策しているという、忠輝による告発の記録はこれまでほとんど注目されてこなかったといつてよい。それは、「木村宇右衛門覚書」に記された政宗の語りに対して信憑性が疑われていたからかもしれない。しかしこれまでの検討からわかるように、細川家や毛利家の史料で確認できる「仙台陣」の用意は忠輝の讒言と関連しているみてよいだろう。忠輝を盟主とした倒幕連携説に拠るかぎり、忠輝と政宗は舅と婿の肝胆相

照らす仲だったということになるが、忠輝の讒言は、大坂夏の陣における忠輝の不始末以降、両者の間に大きな溝が生まれていたことを示すことになる。

松平忠輝が家康の勘気を解くために、みずからの不始末を政宗のせいにしたことについて家康は、次のように述べている。あの不覚悟者（忠輝）は遅参しただけではなく人を誘った、今後は（政宗の）子供と思うな、我らも子とは思わぬ、將軍（秀忠）へも兄弟と思わぬように申しおく、天下に悪事をするこの者は必ず押し込めておく、と（17）。家康の激しい怒りがみてとれる。

家康は忠輝の告発に大いに動揺した。だからこそ將軍秀忠に「仙台陣」の用意を命じたのであった（9）。ただ政宗に対する信頼を、なお捨てきれなかったようでもある。側室の於勝を通じて政宗に早馬を走らせ、早く駿府に上り来るよう求めさせたからである（10）。於勝の産んだ家康の末子市姫は政宗の嫡男虎菊丸と婚約するが、四歳で夭折したという。政宗と関係が深かった於勝を通すことで、家康は政宗の真意をはかろうとしたのであった。駿府に駆けつけた政宗を迎えて家康は、もし謀反の意志があれば上つてこないだろう、思った通りに馳せ参じてくれた、と大いに喜んだという。

さてここで、「木村宇右衛門覚書」に記された六番目の問題、すなわち政宗が家康に後事を託されたことについてみておこう。家臣の止めるのを聞かず駿府に上つたことを家康は忠義の証しと受けとめ、政宗に謀反の意志なしと判断した。かくして家康の疑念を晴らした政宗は、家康からのより強い信頼を得ることになった。死期の近い寝所で、

將軍秀忠が天下を保つことができるかどうかは、ひとえにそなたにかつている、將軍のことをよろしく、と頼まれたという。この政宗の話は『伊達治家記録』（三、三〇八頁）の四月条にも、次のように記されている。

今度駿府御逗留ノ内、一日急ニ登城セラルヘキノ旨上意ニ依テ登城シ玉フ。大神君御蒲団ノ上マテ召寄せラレ、公方ノ御事ヲ頼ミ思召サルノ由上意アリ。公落涙シ玉ヒ、大神君モ御落涙ト云々。且又御形見ノ由仰セラレ、御掛物清拙墨蹟ヲ賜フ。此等ノ事日不知。

これとはほぼ同内容のことが、『徳川実紀』元和二年三月条（第二篇、九一頁）にも記されている。家康が亡くなる前のことである。

このほど松平陸奥守政宗、日々まうのほり、御けしきうかゞひ奉りしに、或日御病牀御蒲団の上まで召れて、いまよりのちいよく將軍家の御事頼み思召むね仰事あり。御形見のためとて、清拙の墨蹟を給ひしかば、政宗感謝にたえず、落涙して御前をまかで兼ねしとなり。

これをみるかぎり、「木村宇右衛門覚書」にある政宗の話は真実だったとみてよいだろう。『徳川実紀』元和二年二月条（第二篇、八八頁）にも、政宗は毎日のように見舞いに登城したとある。なお文中にある

「清拙の墨蹟」とは、鎌倉末期に中国から来日した禅僧の清拙正澄（大鑑禪師、一二七四—一三三九）のことだと思われる。残念ながら、いま所在は知れない。

かくして政宗は、家康お墨付きのもと、二代將軍秀忠の後見人的立場となった。ところが後年、政宗よりも早く黄泉に旅立つことになった秀忠もまた、その末期にあたり政宗を枕元に招いた。「木村宇右衛門覚書」によると、ある日、老中酒井雅楽頭（忠世）に呼び出されたので出向いてみると、屋敷の裏門から登城し、秀忠の寝所に案内されたという。そこでかつての「仙台陣」のことを告白されたというのが、本節冒頭で紹介した内容である。また秀忠は、天下の浪風が静まったのは権現様（家康）の頼みを守ってくれた御手前のおかげだと感謝し、三代將軍家光のことを涙ながらに託したという。徳川將軍家三代にわたる政宗との因縁の深さを物語るものだといえよう。

三 家康の深謀遠慮と政宗

忠輝の讒言に発した政宗謀反への疑いに対して、政宗は駿府に馳せ上って忠誠を誓い、家康の疑念を晴らすことができた。それだけではなく、二代將軍の後見人的な立場となることまで家康に託されたのであった。政宗はそうした家康の厚情に感涙を催しているが、一連の経過をみると、家康は忠輝による不始末や讒言を巧みに利用して、政権の不安要因であった忠輝の排除を断行するとともに、政宗を徳川家の藩屏として見事に取り込んだともいえることができる。

まずは「木村宇右衛門覚書」から、家康の忠輝評を確認しておこう。

例のふかく（不審情者）このもの、その身はおそく（悪）かけつき、てにあはぬ（手付）てもちのなさに人を誘る。向後子ともおもひ給ふへからす。我等も子と（兄弟）そんなぬ也。將軍へもまったくきやうたいとおもわるましきよし、かたく申置へし。天下にさまたけ悪事しいたさんは此ものなり、かならずおしこめ出（押込）すへからす。

大坂の陣に遅参しただけではなく人まで誘った、今後はそなた（政宗）も忠輝を子と思うな、我らも子とは思わぬ、將軍にも兄弟と思わぬように申し付けておく、と家康の怒りはすさまじい。親子兄弟の縁を切るとまで断言しているが、ここで注目しておきたいのは、天下を妨げ悪事をするこの者は必ず「おしこめ」（押込）をすべし、としていることである。忠輝の政治生命を完全に断つことを考えていたのであった。これとはほぼ同様の記事が『徳川実紀』元和二年三月五日条にもみえる。

この日 大御所御けしきこと更重く見えさせ給ひしかば、阿茶の局御側にありしが、御けしきをうかゞひ、上総忠輝朝臣の御事、御かうじゆるさせ給ひ、御対面もあれかしとしきりになげかれしを聞召、少将（忠輝）が容貌氣質、ものゝ用に立つべき者と思ひつるに、去年大坂にて以の外軍事怠り、敵の旗をも見ず。其上將軍の家人を途中に於て私に誅し、其事聞え上ず。我世にあるほど

さへかくのごとく無礼ふるまふおこの者、我なからん後はいかなることなし出さんもしるべからずと御涙ぐませ給ひしかば、局も詞なくあて退き、其よし文かきて朝臣のもとへ送らる。朝臣も驚き、此際に及びかく御勘気かうぶらせ給ふことを深く嘆給ひしかど、御免の沙汰もなし。この後終に伊勢国朝熊にうつらせしも、御遺言なりしとぞ聞えける。

家康の容態が悪化の一途をたどるのをみて、忠輝の生母である阿茶局はなんとか赦免を得ようと懇請した。だが、家康は肯んじなかった。忠輝にはそれなりの気骨があると思つて期待していたが大坂の陣ではヘマをやり、しかも將軍の家来を誅したことを報告しなかった、我（家康）が生きているときでさえ、このような無礼な振舞いを將軍に對してするのだから、我が死んだあととは何をしでかすか心配だ、と述べたという。家康亡きあと、將軍（秀忠）と忠輝の対立を心配していたのである。兄の將軍をすらないがしろにする忠輝をみて、自分の死後には必ず内紛が起きると考えたのであった。徳川將軍家存続のため、存命中に必死の思いで豊臣家を滅亡させたのに、自分が死んだあとに兄弟間に権力闘争がおきたのでは、すべての苦勞も灰燼に帰すことになつてしまふ。なんとしてもそれだけは避けなければならない、というのが家康の思いであつた。家康に勘当されていた忠輝に對して秀忠は家康没後の七月、改易を命じ伊勢の朝熊に配流した。これも家康の遺命であつたと『徳川実紀』は伝えている。

その忠輝が、豊臣方と通じているとして政宗を讒言した。『徳川実

紀』によると、家康は家臣の松平勝隆を越後高田に派遣して、以後対面許さずと事実上の勘当を通告している。松平勝隆が元和元年九月一日に駿府に戻つて忠輝の陳謝の様子を報告すると、家康は「御気色いよいよよろしからず」（第二篇、七一頁）と、ますます不機嫌になつたという。このときに遅参の理由を政宗のせいにし、政宗謀反の讒言がなされたのだろうか。あるいは十一月に上州藤岡に籠居して家康に詫びを入れたというから、そこから書状で告発したのだろうか。讒訴の時期は、いずれとも判じがたい。

政宗はこの年の閏六月、京都において大坂軍功の賞として正四位下に叙せられ参議に昇進した。七月末に京都から江戸に向かい、九月五日には仙台に帰着している。その後、忠輝が家康から勘当されたことを知つた政宗は心配して忠輝に書状を遣わしたようだが、十一月二一日に忠輝から政宗に返書が届いている。そこには、まだ家康にお目見えしていないが、「御氣遣被成間敷候」と記してあつた（『伊達治家記録』三、二九九頁）。もし九月の段階で忠輝が讒言していたとすれば、政宗はそのことを知らずに忠輝の身を案じ、忠輝は何事もなかったかのようにな返事をしていたということになる。

ところで細川家や毛利家史料で確認できる「仙台陣」の情報は、幕府サイドの動きを反映したものである。それが忠輝による政宗謀反の情報によつて発生した動きだということも、これまでみてきた経緯から、かなり確度が高いだろう。その忠輝の讒言は、元和元年の九月から十一月にかけてのことである。だが、細川忠興が「内々陣用意」を指示したのは、翌年一月一日であつた。では忠興は、いったいいつ

「仙台陣」の動きをキャッチしたのだろうか。

そこでいま、『徳川実紀』から細川忠興の動きを追ってみると、元和元年十二月二四日、忠興は駿府で家康に拝謁し、大坂陣における戦功を賞されている。同月二九日には江戸で將軍秀忠に拝謁し、正月二日には諸大名とともに大広間で將軍への年賀の儀に参列していた。こうした動きのなかで忠興は、政宗に関する不穏な情報を入手したのではないだろうか。イギリス商館長のリチャード・コックスが平戸から忠輝と家康との戦争の噂を発信したのは和暦の一月二三日であるから、彼のもとに江戸から情報が寄せられたのは一月上旬あたりのことになる。ということは、一月上旬には江戸市中に「仙台陣」の噂が流れはじめていたとみてよい。

こうした情報を流したのは誰か。当然のことだが、忠輝讒言の情報をもつ家康か秀忠、あるいは幕府関係者であろう。家康は自分亡きあとの憂いを断つために、秀忠と対立する可能性のある忠輝を大坂の陣の不始末を理由に一気に排除した。だが、その忠輝による政宗謀反の告発についても真偽を確認する必要性に迫られたはずである。どうやってそれを確かめるか。それが政宗謀反の噂を流し、政宗の反応をうかがうことだったのではないだろうか。細川忠興や毛利輝元らが一月から二月にかけて、政宗と幕府の動向を注視したのは、そのためである。

「木村宇右衛門覚書」にもあったように、政宗のもとにも江戸から「仙台陣」の情報が次々に寄せられていた。そこに家康側室於勝から、急ぎ上り来たれよという早文が届いたのであるから、政宗としては踏

み絵を迫られる状況になった。謀反の疑いをかけられた政宗は、駿府に急行して家康に忠誠を誓うしかなかったのである。家康から忠輝による讒言を聞かされた政宗は、忠輝と絶縁したにちがいない。これまでのいきさつをみれば、忠輝が改易されたから五郎八姫が仙台に戻ったのではなく、忠輝の讒言と裏切りに怒って政宗は五郎八姫を離縁させたとみてよいだろう。

忠輝の言動に端を発した一件を巧みに利用して、家康はまず忠輝を排除して徳川家の内紛の要素を摘み取った。さらに讒言を口実に、改めて政宗に徳川家への忠誠を誓わせることに成功した。政宗は見事に封じ込められたといつてよい。

四 二回目の謀反の噂

元和二年四月一七日に徳川家康が没した。不思議なことに、そのあとの七月から八月にかけて、再び伊達政宗に関する噂が流れている。イギリス商館長のリチャード・コックスが、上府のために東海道岡崎宿に宿泊していたときの記事である。

当地（岡崎）で我々はこんな報せを受けた。すなわちカルサ様（忠輝）が彼の父（家康）と兄（秀忠）に反抗して彼等を滅ぼして彼の敵フィディア（秀頼）様を擁立しようとする謀反の罪に問われて自分の腹を切ったこと、事態は彼の義父マサモネ殿（政宗）にとって困難なことなるものと考えられており、またイエズス会

士やその他のパードレたちが、子供たちを親たちに、臣下の人々を彼等の生來の君主たちに叛かせるように扇動して、この事態すべての火付け役、教唆者をしている、という噂が広まっていること、等々。

『イギリス商館長日記』一六二六年八月一八日〔元和二年七月一六日〕、

日本関係海外史料訳文編之上、四七三頁）

この記事には当時、世間に流布していた噂がいくつも書きとめられている。忠輝が豊臣秀吉と内通したために將軍から処分されたという噂、忠輝処分に連動して政宗も窮地に陥っているとの噂、宣教師たちが謀反を扇動して国内を混乱させようとしているとの噂、である。

これによると、大坂の陣直後の忠輝処分は、世間には豊臣方との内通のためと疑われていたようだ。忠輝と政宗の舅・婿の關係も周知のことであつたし、この年の正月には江戸で「政宗陣」の噂まで出回っていたのだから、政宗が忠輝処分に連座する可能性もさやかれていたのだろう。こうした一連の動きの背後には宣教師たちの画策があるという噂も、実際のところ豊臣方にはキリシタン大名やキリシタン武士が集結していたし、政宗も支倉常長をスペイン・ローマに遣わして宣教師の派遣を要請していたのであるから、真実味を帯びていたといつてよい。ここには、「豊臣方―忠輝―政宗―キリスト教」の連関による噂の発生がみてとれる。

リチャード・コックスはその二日後、掛川宿で駕籠に乘せられて西に向かう忠輝の一行に出会った。忠輝は配流先で切腹させられるのだ

ろうとあるが、もう一つ、見過ごすことのできない記事があつた。

（前略）皇帝が目下、マサモノ（政宗）殿を討つための兵力を準備しつつあるとの噂もある。

（同前、一六二六年八月二〇日〔元和二年七月一八日〕、四七五頁）

將軍秀忠が政宗討伐軍の準備を開始しているという噂であつた。忠輝処分に連動した將軍側の動きとして流布していたのであろう。一ヶ月ほど遅れるが同年八月二十九日の、細川忠興から細川忠利に宛てた書状にも次のようにあつた。

一、江戸町人、政宗へ御陣立と申候由候、可為雜説候事

（『大日本近世史料 細川家史料』一）

「雜説」とはいうものの、江戸で政宗に対する「御陣立」の噂が広く流れていたというのである。政宗は徳川家に忠節を誓い、家康は政宗に後事を託すほどの信頼關係を得ていたはずである。にもかかわらず、なぜ家康没後すぐに二度目の「御陣立」の噂が立ったのだろうか。おそらくそれは、家康亡きあとの將軍秀忠と政宗との關係が投影されているのではないかと思われる。

秀忠は元和二年八月八日、キリスト教禁令の勵行と、イギリス船の入港を平戸と長崎に限ることを諸大名に通達した。このキリスト教の問題に関連してイギリス商館長のリチャード・コックスは、一六一六

年九月一日（元和二年八月一日）条に次のような記事を残している。

皇帝（將軍秀忠）はすべてのキリスト教徒を日本から追放する意図を有していると考えられる。（中略）皇帝のイエズス会士及び他の修道士たちに対する憎悪は非常に大きいからである。

『イギリス商館長日記』四九八頁

家康の段階では禁教と貿易の間にブレがみられたが、秀忠段階になると禁教方針を明確にし、カトリック国との貿易を断念する方向性が顕著にあらわれてきた。元和二年七月から八月にかけて流布していた政宗に対する「御陣立」の噂は、政宗の遣欧使節派遣問題に関連しているのではないかというのが筆者の推測である。

支倉常長が牡鹿半島の月の浦をサンファン・パウティスタ号で出帆したのは、慶長一八年（一六一三）のことである。同号はメキシコで支倉一行を下ろしたあと、マニラ経由で日本に戻っていたのだが、元和二年八月二〇日、そのサンファン号が支倉常長を迎えに行くために、堺港から再びメキシコに出帆した。そこで、この第二回目の出航がもつ意味を明確にするために、サンファン号が最初に出帆したときの政宗と家康のそれぞれの思惑を、改めて整理しておきたい（平川「スペインの対日戦略と家康・政宗の外交」『国史談話会雑誌』五〇、東北大学文学部日本史研究室、二〇一〇年）。

政宗は、仙台・メキシコ間の太平洋貿易の実現をはかろうとしてい

た。いっぽう、メキシコを植民地としていたスペイン側は、貿易に依る条件として日本におけるキリスト教布教の保障を強く求めている。そのため政宗は、仙台領内の布教を容認し宣教師の派遣も要請して、スペインとの貿易交渉を成功させたいと考えていた。

これに対して家康は、すでに幕府領におけるキリスト教取締りに着手していたが、いっぽうではスペインの植民地であるフィリピンやメキシコとの通商にもまだ期待を抱いていた。政宗による使節派遣と宣教師の招請を家康が容認したのは、それなくしては貿易が実現しないからだが、この交渉によってもし仙台・メキシコ間の貿易が実現した場合、江戸湾にもメキシコ船（スペイン船）を誘致することが可能になるからである。

禁教令については、幕府の意向を受け入れて取締りに着手した藩もあれば、政宗以外にも布教を容認しつづけた大名が存在するなど、一六一三年段階はまだ全国化していない状況であった。だからこそ家康は、伊達領における布教を容認することが可能であった。しかも貿易船が江戸湾に入港するだけであれば、禁教令と矛盾するわけではない。これまでもしばしば、禁教令と、家康が政宗の使節派遣や宣教師招請を容認することは相入れないとされてきたが、決して矛盾も対立もしてはいなかったのである。

家康が使節派遣を容認した理由として、この段階ではまだ大坂に豊臣家が存在し、徳川政権の基盤が安定していたわけではなかったことも大きい。仮に政宗が豊臣方と連携すれば江戸は大坂と仙台に挟まれることになり、徳川家にとっては重大な危機となる。政宗の離反を防

ぐためには政宗の要望を入れざるをえないという、家康と政宗の地政学的な関係があったことも重視しておきたい（前掲平川「慶長遣欧使節と徳川の外交」）。

ところが、二代將軍秀忠と政宗との関係は異なった。家康に忠誠を誓ったとはいえ、家康も配慮せざるをえなかった政宗の存在感は、家康亡きあとの秀忠にとってかなりの脅威だったのではないだろうか。さらに、第二回目のサンファン号出帆は朱印状をもらっていたので幕府公認であることに間違いはないが、スペインを嫌悪し禁教姿勢を強める秀忠にとっては不快なことだったと思われる。ましてや家康が容認していたとはいえ、政宗による宣教師招請は、禁教令に反する行為だとして秀忠の不信感を増幅させた可能性が高い。

秀忠がスペインへの不信感を増幅させたのは、禁教令にもかかわらず宣教師の来日が続いていたことに加え、イギリスやオランダがスペインの侵略性を幕府にしきりとアピールして貿易の主導権を握ろうとしていたことも関係していると思われる。たとえばイギリス商館長のリチャード・コックスは、元和二年（一六一六）に上府して八月一日に將軍に拝謁しているが、その前後には幾人もの幕府関係者に会っている。八月七日（日記ではユリウス歴九月七日）には、秀忠の側近土井利勝の家臣に対して、カトリックの宣教師たちがイギリスで国王の殺害をはかったり信徒を扇動して反乱を起こさせたりしたので、こうしたことを日本でさせないよう皇帝（將軍）に助言をしたほうがいいと忠告している（『イギリス商館長日記』四九五頁）。それだけではなく、幕府船奉行の向井忠勝に会った際、將軍がどこか征服したいのなら

フィリピンがよいとまで勧めている。マニラはスペインのアジア拠点であったから、そこを日本が叩いてくれればイギリスにとっては願ってもないことだった。

またスペインの歴史家ファン・ヒル氏は、伊達政宗の遣欧使節を扱った『イダルゴとサムライ』（法政大学出版局、二〇〇〇年）のなかで、一六一七年一月にコックスがイギリス東インド会社に対して次のような書簡を送ったことを紹介している。すなわち彼は將軍（秀忠）に対して、スペイン国王は家康が死んだと聞けば人を送ってよこし、キリシタン大名が蜂起すればそれを支援するだろうと吹き込んだというのである。右に紹介した八月前後のコックスの動きと重なるものだろう。

こうしたスペインに対する警戒情報は、コックスだけではなく、家康の外交顧問とも称されたイギリス人のウィリアム・アダムス（日本名／三浦按針）やオランダ人からも、しばしばなされていた。そのため秀忠がスペインによる日本征服への疑心を一層強めていった可能性は高い。

ところで秀忠による政宗討伐の噂は、七月中旬には確認できる。リチャード・コックスが將軍や幕閣に接触したのは七月末から八月上旬にかけてだから、コックスの忠告を契機に政宗討伐の噂が流れ出たわけではない。しかし右にみたような激しい情報戦のなかでの、サンファン号の二回目の出帆であった。政宗討伐の噂はサンファン号が出帆する前後の期間に集中的に流れていたとみなすことができる。

以上のような状況からみて、家康から了解を得たスペインとの交渉だとはいえ、家康没後のサンファン号の出帆は、將軍秀忠や幕府にス

ペインと政宗の連携に疑心を抱かせる重大な要素になった可能性が高い。コックスの教唆の有無にかかわらず、政宗がスペインと内応して蜂起するかもしれないという危機意識を高めたとしても不思議ではない。江戸で政宗討伐の噂が流れたのは、こうした背景によるものだと考えておきたい。

ただし前掲した細川忠興の書状にもあるように、一月に流れた陣立ての噂とは異なっており、今回の政宗討伐の噂はたんなる「雑説」とどまり、実際に陣立てした形跡はない。にもかかわらず討伐の噂が流れたのであるから、それはなぜかということになる。ここでは、幕府側から意図的に政宗討伐の噂を流し、政宗を牽制した可能性があることを指摘しておこう。家康没後も幕府は政宗に対して油断していない、というメッセージである。噂の背景にある政治的な意図を、このように読み込んでおきたい。

支倉常長が帰国するのは、それから四年後の元和六年（一六二〇）八月のことである。支倉が仙台に帰着した直後、政宗はすぐさま領内に禁教令を發布した。貿易交渉に失敗した以上、幕府の方針に反してまでキリスト教を容認する必要性がなくなったからである。だが、理由はそれだけではなかった。滞日中の宣教師ジェロニモ・アンジェリスは一六二〇年（元和六）一二月、次のようにバチカンに報じている。

政宗はスペインの国王とローマの教皇に使節を派遣したために、天下を恐れてこの妨げ（迫害）を行っている、と私は考えます。將軍の父（家康）はこのことすべてを知っており、將軍自身

もまたそうでした。それで彼らはそのような使節をまったく気に入りませんでした。むしろ彼らは、彼がその大使を遣わすのは天下に対して何らかの叛逆を働こうとして、かの国王とキリスト教徒たちと連合するためであろうと考えました」

（仙台市史特別編8『慶長遣欧使節』四二二頁）

注目しておきたいのは、政宗による遣欧使節の派遣を秀忠が、スペインと連合して將軍に叛逆するためだと受けとめているという噂の存在である。その嫌疑をはらすために政宗は支倉常長の帰国直後から突然キリスト教の取締りに走るようになった、とアンジェリスはみなしている。第二回目のサンファン号出帆時に流れた政宗討伐の噂は、こうしたかたちで効き目をあらわしたのであった。

おわりに — 徳川の知力、政宗の忠誠 —

前掲した「木村宇右衛門覚書」の⑯にある政宗の言葉は、じつに興味深い。原文から引用しておこう。

今御不例のみきりをうか、ひ、天下にさまたけいたすへきいはれなし。跡くうはふへきちせつたに身にさつかぬ天下なれば（略）のそみなし、と申上ければ（以下略）

いま家康殿が倒れたのを幸いと、徳川家の天下を妨げようとは考え

でもない。以前にそのチャンスがあつたときですら手に入れることができなかった天下であるから、いまはなおさら望みはない。

これを家康に語つたというのだから驚かされる。しかし、若かりしころの、天下取りに燃えた政宗の野心をストリートに言いあらわしていた。戦国大名は誰しもが天下取りをねらつた。しかし豊臣秀吉と徳川家康が全国制覇を遂げていくなかで、その願ひも挫けていかざるをえなかつた。豊臣勢力も家康の力によって壊滅させられた。政宗の右の言は、まさにそうした時代状況の変化を端的に示すものだといつてよい。

もちろん本音では、天下取りの野望を終生抱き続けたかもしれない。しかし家康は、その野望を不発に終わらせるだけの知力と策略を発揮して政宗に臣従を誓わせた。その総仕上げとでもいうべきが、松平忠輝の讒言を利用した一件であつた。

秀忠もまた、家康亡きあと、独力で政宗に対峙する力を獲得しなければならなかつた。遣欧使節支倉常長を迎えるために、元和二年八月、サンファン・パウティスタ号がメキシコに向けて二回目の出帆をすることになっていた。それが政宗対策の好機として利用された。政宗討伐の噂を市中に流すことによって、海外との通交をめざす政宗を強く牽制したのである。その直接の反応を政宗の側で確認することはできないが、支倉常長帰国後の政宗によるキリスト教取締りの断行ぶりを見れば、その効果だとみることが可能であろう。秀忠もまた情報戦をしかけることによって、政宗を徳川の忠実な家臣とすることに成功したのであつた。